

# 東京の橋

## 下町の誌上橋めぐり—湊橋 橋名の由来とポスト・モダンの橋

日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授（産業考古学会 会長）

伊東 孝

湊橋の特徴である袖高欄そでこうらんに併設されたベンチなどを確認するため、写真撮影を担当している加藤豊さんと一緒に陸から現地取材した。橋詰広場にある説明板や橋の写真を撮っていると、釣舟の橋巡りでは気付かなかった点をいくつか発見した。今回はそれを中心に書いてみたい。文献考証的な話が多いので、現在の橋に関心のある人は、3に進まれることをお勧めする。

### 1 橋名の由来

湊橋に限らないが、橋の調査をするとき、橋本体はもちろんのこと、橋の周りたもとにある施設やストリート・ファニチャー（街灯やベンチ、トイレ、環境オブジェなどの「街路備品」）、橋の袂の家などにも注意を払って観察している。橋の存在を意識してベンチやトイレのデザインがうまくなされていると、楽しくもなり、うれしくもなる。反対にデザインがまずいと批判的になり、橋の存在とまったく関係なく施設がつくられていると、腹立たしくなる。とくに東京の震災復興橋梁は、橋の袂に橋詰広場はしづめひろばがつくられたので、橋詰広場内にはいろいろな施設が備えられている（横浜の震災復興橋梁には、橋詰広場がつくられなかった）。代表的なのが、「橋詰広場の3大施設」と呼んでいる

交番・トイレ・消火器具納庫の3点セットである。橋詰広場は、原則的にひとつの橋に4ヶ所あり、各施設が3ヶ所に分散配置される。三つの施設がそろうのは、幹線道路の橋詰広場であり、補助線街路の橋詰広場には、交番を除いたトイレや消火器具納庫が配置されていることが多い。湊橋には、右岸上流側の橋詰広場にトイレがつくられている。3月11日の東日本大震災では、首都圏の帰宅歩行者に橋詰トイレが大いに役立った。

湊橋の場合、土地の関係で橋詰広場は3ヶ所しかなく、左岸の上流側には設置されていない。その代わり現在では、上流側の川沿いに細い带状公園が高架道路の下まで伸びている（これは当初からのものではなく、後につくられたと推測している）。

今回注目したのは、右岸下流側の橋詰広場にある赤御影石でつくられた碑である。湊橋の由来の書かれたプレートと、『江戸名所図会』に描かれた湊橋界隈の俯瞰絵を焼き付けたプレートが取り付けられている。中央区が平成2年3月に設置したもので、かれこれ20年近くになる。印刻された文字の黒インクが多少はがれてはいるが、まだまだ十分読めるので、丁寧な仕様でつくられたことがわかる。

プレートの最初のパラグラフは、「この橋は、霊岸島（現在の新川地区で通称こんにやく島と呼ば



写真1 湊橋の側面景（下流側から）

三径間の上路式コンクリートアーチ橋で、アーチは3心円アーチ。橋長：49.68m、幅員：18.0m（車道11.0m、歩道3.5m×2）。昭和3年6月竣工。東京市施工。

れていた）と対岸の箱崎地区の埋立地（隅田川の  
中州）とを結ぶために、延宝7年（1679）に架け  
られました。」とある。湊橋は、江戸の初期にす  
でに架設されていたことがわかる。

第二パラグラフ。「この地域は、江戸時代から  
水路交通の要所として栄え、とくに江戸と関西を  
結んで樽廻船によって酒樽が輸送されていまし  
た。『江戸名所図会』によるとこの橋は、当時の  
湊町を形成した日本橋川河口の繁栄を象徴してお  
り、また橋を挟んだ川岸には倉庫が建ち並び、当  
時の賑わいが偲べれます。」下にある『江戸名所  
図会』のプレート図が生きてくる。

得心したのは、第三パラグラフであった。「橋  
名の由来については、江戸湊の出入口にあったと  
ころから、湊橋と名付けられたものです。」成る  
程と思った。湊橋の上流には、江戸橋、日本橋が  
あり、「江戸」「日本」という、現状から考えると  
大げさな橋梁名がつけられている。橋名だけを考

えれば、隅田川橋梁より格が上である。河川名も  
日本橋に由来するし、「日本」と名付けられた日  
本橋川は、河川名でいえば最重要河川というこ  
とになる。「日本橋」は大阪にもあるが（ただし「にっ  
ぽんばし」と読む）、「日本橋川」は東京にしか  
ない。

## 2 疑問点

### ●橋名の由来

上述したことは、パラグラフごとに書いたので、  
説明文が途切れ途切れになってしまったが、一度、  
説明文だけを読み直してほしい。文章の流れから  
わたしは、「江戸湊の出入口にあたるところから、  
湊橋」ということが、『江戸名所図会』に書かれ  
ていると思った。そこで『江戸名所図会』には、  
どのように書かれているのだろうと興味を感じて

調べてみた。

しかし『江戸名所図会』には、そのような記述は見当たらず、「湊橋」の項目もなかった。関係ありそうな記述は、「湊稲荷の社」であった。場所はややちがい、次のように記されている。「高橋の南詰にあり。鎮座の来由、詳らかならず。この地は、廻船入津の湊にして、諸国の商ひ船、普くここに運び、碇を下ろして、この社の前にて、積むところの品をことごとく問屋へ運送す。このゆゑにや、近世、吉田家より湊神社の号を贈らる。当社は南北八丁堀の産土神なり。…」(近年発行された『江戸名所図会事典』別巻二の索引で調べても「湊橋」の項目はないし、文章中にも記載がないことが判明した)。

それでは、説明板にあった橋名の由来は、どこに書かれているのか。出典はなんだろうか。基本は、時代をさかのぼって探すのが筋だろうが、とりあえず手元にある文献をいくつか探してみた。まず明治に発行された『新撰東京名所図会』。湊橋の項目はあったが、橋名の由来は記されていない。

たどり着いたのが、東京市日本橋区役所が大正5年に発行した『日本橋区史 第一冊』にある「諸船入港の地なるが故に名づくといふ」である。ここでも「名づくといふ」と伝聞の調子で書かれ、「湊橋と名付けられた」とは言い切っていない。

読者の中には第一パラグラフにあった「延宝7年(1679)に架けられました。」の出典をみればよいのではないか、といわれるかも知れない。ここで注意すべきなのは、「架けられました」の意味が、「初めて」なのか、「架け替えられた」のかということである(本文の最初でも気をつけて叙述した)。

江戸・東京の橋事典とでもいべき『東京の橋』を著した石川悌二氏は、「創架は延宝七年」と明記している。しかし根拠とした文献は、同年の町触<sup>まちぶれ</sup>で、次のように書かれた文書である。

「一、今度湊橋御普請入札に仰せつけられ候間、望みの者は今明日中喜多村(町年寄)へ参り、注文写し入札仕るべく候。札御披き成られ候日限は、

来五日にてこれあり候間、左様心得、町中残らず相触べく候。以上、九月晦日」(( )内は、筆者の注か?)

この文言だけで判断すると、まずここには「創架」とか「はじめて」ということは書かれていない。町触の文章は、ただ単に「湊橋の架け替え」を伝えたことにはならないのだろうか。第二には、すでに「橋名」が湊橋と決まっていることが気になる。はじめて架ける橋なので、橋はまだ存在していないのである。湊橋というだけで、聞いた人はわかるのだろうか、また高橋の南詰に湊神社があったので、まず町中の人聞いて思い浮かべるのは、亀島川のどこかに架けるのではないかと想像するのではなかろうか。

## ●「樽廻船によって酒樽が輸送」への疑問

もう一つの疑問点を呈しておく。

第二パラグラフの冒頭は、「この地域は、江戸時代から水路交通の要所として栄え、とくに江戸と関西を結んで樽廻船によって酒樽が輸送されていました。」と書かれている。「この地域」というのは、前文との関係でいえば、川の両側地域と解釈されるが、これはちがう。日本橋川沿いには多くの河岸や物揚場があり、材木や米や魚など、いろいろな物資を運ぶ船が行き来していた。酒樽を積んだ船も通ったかも知れないが、メインではない。酒樽は前回ふれた霊岸島の新川沿いの区域に、主として運ばれたのである。文政期(1818~29)の『江戸買物独案内』によれば、当時江戸の下り酒問屋37軒のうち、約7割が新川にあったという(『大江戸今昔マップ』新人物往来社)。

ちなみに碑にあったプレート絵は、樽廻船や荷船がにぎわっている図を描いたものではない。図は、山王祭の様子を描いたもので、茅場町にある山王旅所まで、日本橋川を挟んで北側と南側の通りを行列が練り歩く様子を描写している。『江戸名所図会』では、見開き4セットの図で構成している。最初は「六月十五日 山王祭」で、土車につけられた前後2本ずつの柱を16人で担ぐ(引

張る?) 図が、次の「其二」「其三」では、北東の方向から茅場地区と霊岸島を斜めに俯瞰した図が描かれ、四セット目は「永田馬場 山王御旅所」の図である。赤御影石のプレートは、「其三」の図を取り出したものだ。

「其二」は鎧の渡しの手前から箱崎川まで、「其三」は霊岸橋・亀島川から湊橋までが描かれている。「其二」には、巨大な象も練り歩いている。行列の華美で豪華な様子を、『江戸名所図会』では、次のように表現している。「その行装、榊・大幣・菅蓋・錦蓋すげがさ にしきのかさ、雲のごとく、社司・社僧は騎馬に跨り、あるいは輿に乗じ、…」前後には、お供の者がつき従う。「諸侯よりは神馬・長柄の槍等を出だされて、…」行列に加わり、警護が厳重である。「氏子の町々よりは、思ひ思ひに練物、あるいは花屋台・車楽等だんじりに、金欄緞子などのまん幕をうちはへ、おのおのその出立花やかに、…、善美を尽くせり。」

このような華やかな行列が図の部分だけでも、ざっと1kmは続いている。橋の袂や主要な町角には、「御祭礼」と書かれた幟も掲げられ、お祭り気分を盛り上げる。霊岸橋も現在の位置より日本橋川に寄っており、現在の日本橋水門の前あたりに位置する。亀島川の右岸沿いと日本橋川の左岸沿いには倉庫が建ち並び、それぞれの対岸側はオープンな河岸地になっている。

隔年6月15日の祭礼のときには、「神輿通行の御道筋は、横の小路小路は矢来を結はしめて、往來を禁ぜらる。まことに大江戸第一の大祀にして、一時の壯観たり。」(『江戸名所図会』)。図をよくみると、道の両側には柵が設置されて観客席が設けられ、見物人は行儀よくかしまっている。川面は見物用の屋形船で占められ、屋形舟の屋根に上った見物客まで描かれている。

山王社は、永田町にある日枝神社の旅所で、山王祭は、神田祭とともに江戸天下祭のひとつであった。

### 3 | ポスト・モダンの橋

碑の説明板の解釈が長くなってしまったが、現在の橋について話を進めよう。

説明板は、現在の橋についても記す。「…橋は、関東大震災後の復興期に再建されたもので、平成元年度の整備事業において、装いを新たにしました。」以下、橋梁の諸元(写真1のキャプションを参照)が続く。

橋は、平成元年中央区の橋梁美化事業で、側面に白と灰色のタイルで縞模様が入れられ、ポスト・モダン調に整備された。白タイルは上から縞模様の幅が狭くなり、灰色タイルは逆に下から上にいくに従って幅が狭くなって、グラデーション効果をあげている。橋脚の真ん中には、帆かけ船をデザインしたメダリオンがある。平成元年はそろそろバブルがはじける頃で、ポスト・モダンも最終期を迎える。橋梁美化事業のデザインにも時代が映し出されている。

今回気が付いたことは二つあった。ひとつは、いつもは満潮時に合わせて釣舟で橋めぐりをしていたので気が付かなかったが、今回はたまたま引潮に遭遇した。潮が下がって橋脚の根元部分まで見えた。根元部分にはタイルが貼られておらず、見栄えは今ひとつよくない(写真2)。貼るからには大潮の引潮時にも地のコンクリートが見えないような配慮がほしかった。

もうひとつ気が付いたのは、建物でいえば軒にあたる橋の本体と高欄部との収め方である。橋の側面は遠目でみると、高欄が壁高棚のこともあり、のっぺりと平板に見える。しかし今回よくみると、一番上の灰色の帯は表面を少し突出させているのだ。壁高欄との境を意識して出っ張りをつけて陰影を出そうとしたにちがいない。しかし意図通りにはならなかった。この部分は、一番上が細い縞模様なので、無垢の同色系統の石を使って質感を変え、高欄部分と橋体との縁切りを強調した方がよかった。

帆かけ船をモチーフにしたメダリオンのデザイ

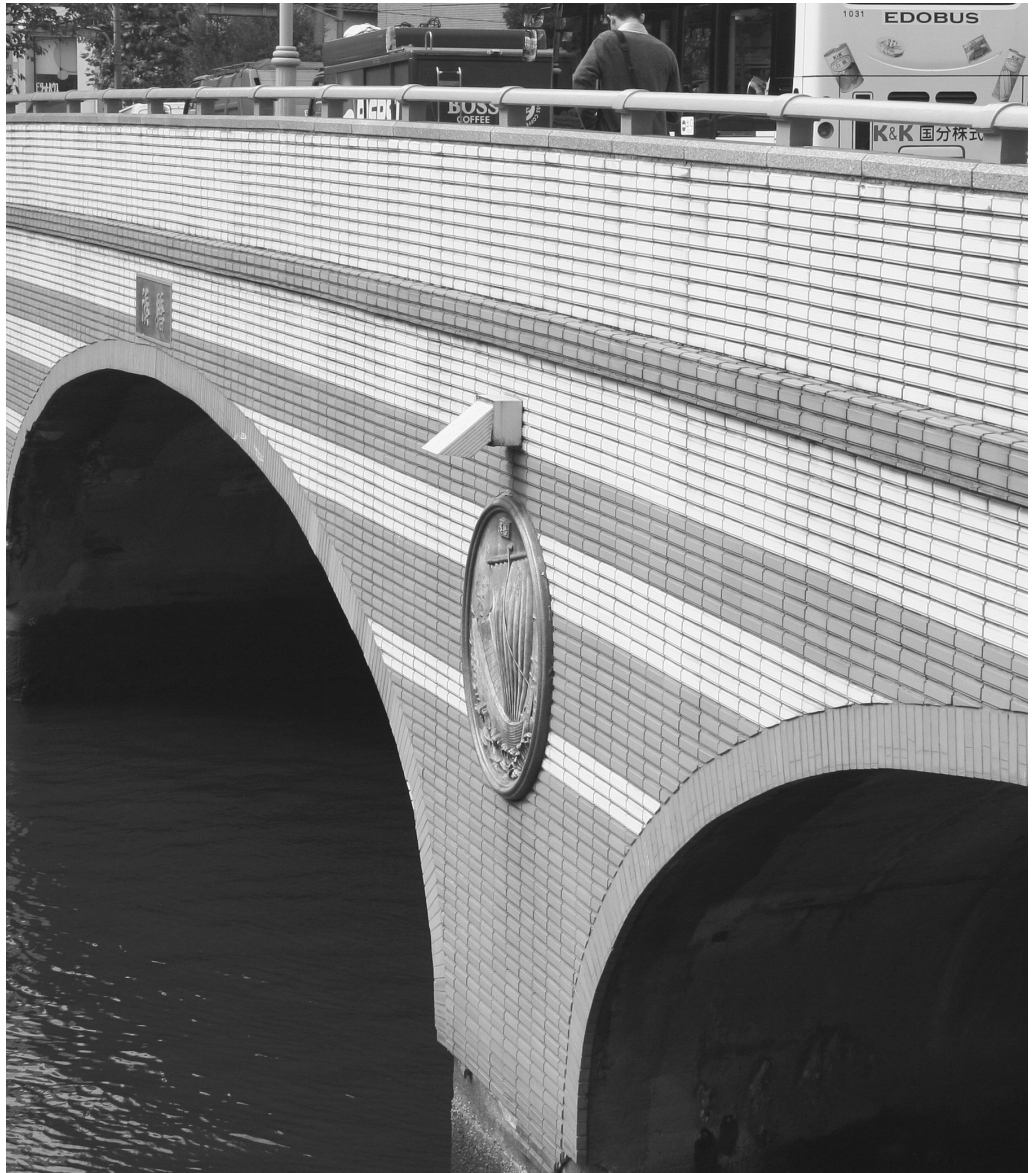


写真2 橋脚スパンデル部のメダリオン

現実的なことをいえば、日本橋川には橋がかかっていたので、このような帆かけ船は航行できなかった。

ンは、「たゆたえども沈まず」という川を航行する帆船をデザインしたパリ市の紋章が思い出される。ポスト・モダンに具象的な和船はあわない。ではどのようなデザインがよいのか、というところには答えを見いだせないが、和船を抽象化する案はあった。またそもそもメダリオンは必要なのか。この問いに関しては、メダリオンでなくてもよいが、橋脚面上のスパンデルには、何かが必要

だったと思う。

高欄の高さも今日の仕様に合うように高くしているが、コンクリート壁を高くしないで、高い分だけ、旧高欄にパイプの手すりを付けくわえて仕様をクリアしている。このデザイン的対応は評価したい。そうでないと壁高欄の面が大きくなって、橋の全体のバランスを崩すことになった（市民運動で、高欄の高さを変えなかった新潟の万代橋のよ



写真3 袖高欄に併設されているベンチ（右岸上流側）

震災復興橋梁で袖高欄にベンチを併設したのは、湊橋と厩橋の2橋のみである。湊橋に大きな親柱がなく、高欄と一体的につくられていることも特徴のひとつといえる。

うな事例もある。橋に対する市民の愛着度の違いといえる）。

ところでむかしの橋はどのようなデザインだったのか？ 橋梁本体は、コンクリートの打ち放しで、橋脚と橋台の下部に淡い茶色のタイルが張られていた（元の色があせたのか？）。橋脚の上には、小さな鋳物の橋名版がはめ込まれ、単調なコンクリート面に、タイルとともにポイント・アクセントになっていた。湊橋には添設管がないので、橋の姿がすっきりみえる。しかしこれは添設管がないのではなく、添設管への配慮は当初から設計意図に組み込まれていたことがわかる。釣舟に乗らないとわからないが、橋の下から見上げると、橋梁本体に溝が入れられ、そこに添設管を通すスペースをつくっていたことがわかる。

また最初に話した袖高欄のベンチも、当初からのデザインである。

すっきりしたデザインの中にも、ないしはすっ

きりしたデザインにするために、しっかりとしたデザインの配慮がなされた橋であることがわかる。

現在上流側には、補剛アーチの水管橋が設置されている。下流から眺めると、湊橋と水管橋がダブルシルエットになって不思議な橋梁形態をみせている。

（写真：加藤 豊）

